

中原中也
山羊の歌

◎特別寄稿

『夏日狂想』長谷川泰子

——あったかもしれないもうひとつの人生

窪 美澄

◎トークイベント

公開対談 三瀨末雄×坂口綱男

◎テーマ展示

詩集『山羊の歌』

◎特別企画展

坂口安吾と中原中也

——風と空と

◎企画展ピックアップ

中也の住んだ町——幼少期

中也、この一篇——「一つのメルヘン」

◎記念館ニュース

◎新収蔵資料紹介

「朝の歌」原稿

瀧口武士宛書簡

主なできごと(2022年度行事記録)

第28回中原中也賞

2023年度行事予定

中原中也記念館 館報 2023

28

Public relations magazine

第28号

『夏日狂想』 長谷川泰子

— あったかかもしれないもうひとつの人生

窪美澄



長谷川泰子（昭和4年 撮影・堀野正雄） 女優として活動していた頃。芸名は陸 礼子。
くがれいこ

昨年の秋、『夏日狂想』（新潮社）という作品を上梓した。タイトルの『夏日狂想』はもちろん、中也の詩「春日狂想」をもじったものである。主人公のモデルは長谷川泰子。ご存じのとおり、京都で中也と運命的な出会いをし、二人で上京し、小林秀雄に惹かれ、「奇怪な三角関係」（小林）に陥ったといわれる、その女性である。

長谷川泰子を書くこうと心に決め、資料に目を通し始めると、どうにも心が落ち着かなくなった。ファムファタルはまだいいとして毒婦、あるいは、はつきりと心を病んだ女、と書いてあるものも幾つか目にした。私はもちろん泰子に直接会ったわけではないから、彼女が本当のところ、どういう人間だったのかはわからない。けれど、少し悪く書かれ過ぎてはいないだろうか？ そんな感想を持った。私が目にした中也論や評伝の書き手はほとんどが男で、そこにどうにも男女の不均衡を感じてしまう。中也と小林秀雄という才能が凝縮したような人間のそばにいた女、その視線に嫉妬めいたものが含まれているのを強く感じたのも事実だ。時代が時代でなかったら、泰子はずっと違う生き方ができたのではないか。それが最初の足がかりになった。では、どうやって物語を進めていくのか。

そんなときに見た映画がひとつのヒントになった。タランティーノの『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』である。これはハリウッド女優シャロン・テートがカルト集団チャールズ・マ

ンソン・ファミリーに殺害された事件を背景に1960年代のハリウッド映画界を描いた作品で、ドキュメンタリーではなくあくまでもフィクションである。だから、実際にシャロン・テートを思わせる人物が出てくるのだが、（ここからはネタバレになります）映画のなかでは殺害されない。この映画のように、実際にいた人物を動かして壮大なフィクションが作れるのではないか、泰子があああの時代に物書きを目指していたら、当時の文壇史も描けるのではないか。できないかもしれない。でも書いてみたい。そんな想いで物語がスタートした。

泰子は礼子に。中也は水本に。小林には片岡と名を纏まとわせた。広島で生まれミッションスクールに通うお嬢様であった礼子（泰子）は、まずは女優を目指して京都へ赴く。そこで立命館の中学生であった水本（中也）に出会う。泰子が中也に初めて出会ったのは、京都の表現座という劇団の稽古場。そこで中也會の場面は長谷川泰子が語った言葉を編まれた村上護氏の『中原中也との愛 ゆきてかへらぬ』（角川ソフィア文庫）に書かれたとおりだが、それをフィクションとして、例えばこんなふうにした。

見慣れない一人の少年がふらりと入ってきた。誰かの知り合いが稽古場を訪れることは少なく

かったから、誰も少年のことを珍しがったり、声をかけたりはしなかった。壊れかけた椅子に座っている「彼」は、まるで子どもようだった。芝居の台詞を口にしながら、目の端にその少年の姿が映った。（中略）黒目がちな大きな瞳。まっすぐにこちらを見る強い視線には迷いが無い。
休憩時間になると、すぐに礼子に話しかけてきた。「礼子さん？ おじさんの知り合いだろうか？ おじさんが、詩がわかる人がいるって、それで僕、いてもたってもいられなくなってきた」
そう言って彼は一冊の大学ノートを見せてくれた。けれど、そこにはダダダダダダダ……という文字の羅列があるばかり。それでも礼子はこんな子どもみたいな少年がこれを詩だという、そのことに興味を持った。

「へえっ、おもしろいじゃない」
礼子が素直にそう言うと、彼は鼻の付け根に皺を寄せてうれしそうに笑った。
「これがダダの詩なんだ。僕は詩人なんだ。礼子さんは……」
「私は女優よ」

礼子は彼から目を逸らさずに言った。彼が一瞬ひるんだ目で礼子を見た。
正確にいえば、彼はまだ詩人ではなく、礼子もまだ女優ではなかった。彼らはまだ孵化前の卵だった。それが孵化するまでには、それ相応の時間と熱が必要だった。

『夏日狂想』より

評伝ではないのだから、史実に忠実に基づく必要はない。そう心に決めて、泰子の、中也の、小林の物語を紡いでいった。小説の後半は、泰子の実人生から大きく逸脱して、礼子（泰子）が表現の場を、物を書くことに求めて四苦八苦する様子を描いた。確かに泰子も中也にとっても小林にとっても、詩作の、あるいは思索のフックを与えてくれるような存在であったことには間違いはない。けれど、一生、彼らのミューズのような存在でいることに、女は満足するものだろうか。もちろん、いつの時代にも「書かれたい、描かれたい、あるいは撮らりたい女」というのはいて、それに異議を唱えるつもりもない。けれど、時代がそうした女であることを、強く女に押しつけているのだとしたら。女だって物を書きたい。何かを表現したい。そんな思いはつい最近まで否定され続けてきたのではないだろうか。だから、礼子には戦中、戦後を生き延びて、物書く女としての生を生きても良かった。

片岡と水本は今、ランボーについて丁々発止のやりとりを続けていた。それを見て、水本が片岡に夢中になる理由がわかった気がした。片岡は水本より五歳上。彼の言葉には水本にはない経験と深い思索から生じる重さがあった。途切れなく言葉を放つ片岡を礼子は見た。見られているということがわかっていて、片岡はあえて、礼子の顔を見ない。まるで空中戦だ、と礼子は思った。時折、片岡は水本に目をやるが、返す言葉とは裏腹にその視線には鋭さはなく、まるで弟を見るかのような慈愛にあふれている。一方の水本はと言えば、二人のそんな様子にはまるで気づかず、機関銃のように片岡に言葉を返している。

『夏日狂想』より

初めて中也の詩に出会ったのは、中学生だろうか。それ以上に印象深かったのは高校時代のことだ。高校のときの国語の先生は教科書を使わずに授業をする人で、私はその授業でアルチュール・ランボーの名を知り、当時、新進気鋭の詩人であった榎原淳子の存在を知り、北園克衛や中也の詩の深い解釈を心に刻みつけた。

中也の詩に再び出会ったのは、私が二十六のときである。

初めての子どもを生後十八日で細菌性の髄膜炎で亡くした。体調が悪いとか、そんな予兆もなく、ミルクを飲まないと思って病院に行き、そのまま入院。その翌日には帰ってこない子どもになった。

呆然自失の日々のなか、好きだった読書もままならない。それでも、たった一人で、子どもの遺骨のある部屋にいたくなくて、お金もなく、時間をつぶすためによく近くの図書館に出かけた。小林秀雄が泰子と暮らしを共にしていたあたりだ。どんな本を選んでも、読んでも、それは自分の心を通り過ぎるだけだった。子どもの死、という重さとフィクションの軽さが釣り合わない。どうにも歯がゆかった。そのとき、ふと頭に浮かんだ。子どもを亡くした詩人がいなかったらどうか。そうだ、中原中也がそうだった。

また来ん春と人は云ふ

しかし私は辛いのだ

春が来たつて何になる

あの子が返つて来るぢやない

「また来ん春……」より

愛するものは、死んだのですから、たしかにそれは、死んだのですから、もはやどうにも、ならぬのですから、そのものために、そのものために、

「春日狂想」より

一人の詩人に出会うことは、誰にとっても、いつの時代においても、どこか運命的だ。

何もしなければさらさらと日々のあわいに溶けて流れていってしまう、心のなかのこの感情。流して忘れてしまったほうが、幸せなこともあるだろう。けれど、そこで踏んばって血を吐きながら、言葉を紡ぐ人がいる。現世に詩で感情を繋ぎとめる。簡単な仕事ではない。一文字一文字、蚕が糸を吐くような作業であることには間違いはない。それが、何十年も後を生きる人の心を震わせる。そんな奇跡があるだろうか。救われた、という言葉は簡単には使いたくないが、二十六の私はあ

こかを深く慰撫してもらったのだった。

長谷川泰子という女性には確かに興味があった。

そう中也に言われているような気がして筆が止まることもあった。

「それでいいのかよ？ そんなふう書いて満足かよ？」

長谷川泰子にとっても、中也との出会いは、終

生消すことも、忘れることもできないものだったのに違いない。彼らは会いたい人がいれば歩いて会いに出かけ、酒をのみ、話し、触れ、たとえ、心が壊れそうになっても、何かを表現する、ということから逃げるのがなかった。実人生の長谷川泰子は、文字で何かを表現することで名をあげることはなかったが、彼女の心のなかには常に詩の種が蒔かれていたのではなかったか。その種を蒔いたのは中也であり、水をやったのは小林秀雄ではなかったか。

『夏日狂想』をある人は「弔い合戦の小説」と評したけれど、私はあったかもしれない泰子のもうひとつの人生を描いて満足している。そして、書き終わって思うのだ。自由に何かを表現できる時代の素晴らしさ、そして、その時代がいつまでも続けばいい、と。

窪 美澄 Kubo Misumi

1965年東京都稲城市生まれ。2009年「ミクマリ」で第8回R-18文学賞大賞を受賞し、小説家デビュー。2011年、受賞作を取録した『ふがない僕は空を見た』（新潮社）で山本周五郎賞受賞。2012年『晴天の迷いクジラ』（新潮社）で山田風太郎賞受賞。2019年『トリニティ』（新潮社）で織田作之助賞を受賞。2022年『夜に星を放つ』（文藝春秋）で直木賞受賞。最新作は『タイム・オブ・デス、デート・オブ・パース』（筑摩書房）。



窪 美澄『夏日狂想』
(2022年、新潮社／装画 Minoru)

坂口安吾と中原中也―風と空と―関連イベント

公開対談 三瀧末雄×坂口綱男

令和4年8月6日 ●会場：山口市菜香亭 ●司会：中原豊（中原中也記念館館長）

坂口安吾の長男・綱男氏と、その家庭教師だったという縁を持つ三瀧末雄氏。坂口安吾と中原中也を起点にして、芸術のこと、おふたりのエピソードなど、ざっくばらんにお話しいただきました。その一部をここに紹介します。

■坂口家の家庭教師

坂口 僕は勉強しない子どもだったんです。親が心配しまして、家庭教師をつけると。僕についての家庭教師というのが、およそ家庭教師とは思えない人たちなんですけれども、そのなかで一番すごかったのが、三瀧さん。

うちに来て何をしていたかについて、まず、月金だったんですね。月曜日は「少年ジャンプ」と「チャンピオン」の発売日なんです。水曜日は「サンデー」と「マガジン」、金曜日は「少年キング」の発売日だった。とりあえず、「これもやれ」と

か言われてやっている間、彼は僕のベッドにひっくり返って、おもむろに2冊の少年誌を全部すみからすみまで読むというようなことをやっていた。僕の本にもうすでに書いているので、これは暴露ではないですよ。

三瀧さんが、国語の授業とか受験とかには出てこない、中原中也の本を僕の机の上にボンと置くんですよ。「読め」って言うんですね。彼のお気に入りだった「サーカス」だとか、「骨」だとかを、僕にちよつと読んで聞かせたりするわけですよ。「どう思うよ？」とか言われるわけですよ。それが中也との本場に最初の出会いで、僕の持っている中也の本の最初の1冊は、ボンと目の前に置かれた中原中也。

そのあと、『あしたのジョー』という漫画がそろそろ完結するというところで、力石徹というボクサーが亡くなるわけですね。武道館で力石の本当のお葬式をやるんです。三瀧さんは力石の葬式に参列したあと

ごいなど。僕のなかでは坂口安吾っていうのは当時も読んでいて、「日本文化私観」なんかはかなり影響されてましたから、これはと思った。

それでそのお兄さんに会いに行ったら、「君はね、三千代夫人に取り入ってくれ」と。そして、君からも映画化の話をしてくれって言われたんです。まあ22歳の若造にそのへんのことにはよくわからない。僕はともかく家庭教師をやればいいんだな、みたいなことで、実はそういう話があったのです。

三千代さんは、坂口安吾の作品を映画とか、お芝居とかにするのを、なかなか許可しなかった。のちに野田秀樹さんが芝居でやったでしょ？

坂口 芝居でやったのは夢の遊眠社の「贖作 桜の森の満開の下」。「夜長姫と耳男」がメインで、当然のことながら原作とは全然違う作品になるわけなんです。安吾の女房としては、原作から外れないでほしい、それから、安吾の精神というものをきちんと劇を観た方に理解していただくような作品にしてほしい。安吾を守るということでは強烈な、安吾を愛していた人だったんです。

息子はそれを見ていますから、母が死んだときに著作権継承者として、自分から劇化、映画化されるものに対して、どういうふうにしていいかわからないぐらいだったんだけれども、その前に野田秀樹さんの「贖作 桜の森」を母の

うちにやって来て、忘れもしない、カミユの「シシユポスの神話」の本をボンと置くんです。そこで不条理を語るんですね。これも受験には関係ないです。受験の問題に不条理なんていう一行は一言も出てこない。でも、不条理とは何たるか、とかいうような話をするわけです。

そうやって教育をされながら、学生運動のヘルメットによるセクトの見分け方とか、そういうのも授業内容なんです。正しい火炎瓶の作り方っていうのも。だから、それがあって今の僕がある。そういう先生方に囲まれて育てば、学校も留年はするわ、退学はするわ。

坂口安吾って新潟の旧制中学を退学させられて、それで東京の豊山中学という中学へ行くんですが、息子は全く同じことをやってしまったわけですね。

三瀧 ご自宅は新宿の三栄町にあったんですが、番町麹町日比谷東大っていう、昔、秀才が行く路線のなかの、番町小学校を出て、麹町中学校の中学三年生で。もう名前だけ聞くと、番町、麹町、すごい！次は日比谷だね、という感じなんです。本人はおそらく勉強が好きじゃなかったんだと。だから勉強しない。

でも教育っていうのは、上から何か教えていくことじゃなくて、興味を持たせることが必要なんじゃないかな。僕から見ると、彼はとにかく伸びしろがたくさんあるとていい少年。当時、中也是僕にとつてスターだったので、中也

隣で観たんですよ。母が怒るんじゃないか、大丈夫かこれ？ っていうたら、ニコニコ笑っているんですよ。だから、野田秀樹さんは、安吾の作品が曲がった解釈をされることを嫌っていた母が初めて認めた、安吾のスピリットを作品として表に出した人なんです。

母は著作権の問題は一切、自分から手を放さなかったんだけど、手塚眞監督の「白痴」だけはあなたがやりなさい、あなたが手塚さんとどうするか決めなさいと言われて、初めてそういうふうに投げられた。そのとき思ったのは、作家の作品が、例えば映画監督の手に渡るとすれば、その映画はもう映画監督の作品だって。だから、手塚さん好きにして、僕なんにも言わないからっていう、母にしてみればちよつと恐ろしい投げ投げ方をしたんです。

今の僕の考え方としては、安吾の作品を何かにするときには、そ

を読めば何か言葉が通じるかもしれないと思った。あとは、お父さんの本読んだらどう？ と薦めたんですよ。父親の本までいくにはたぶん時間がかかったんだろうと思うんですけども。

■サティを通じた縁

三瀧 それでもなんとか彼を高校に入れないといけないので、夏休みに僕の家を呼んで、集中的にちゃんと勉強を教えました。英語も国語もいろいろと、ある種の受験勉強みたいなことをやりました。

その時、三千代夫人が訪ねてきて、うちの親父（三瀧末雄 音楽評論家）に会ったんです。そうしたら親父が、「そういえば安吾が来たなあ、俺のところへ」っていう話になったんですね。それで僕も初めて、坂口安吾っていう親父は会っていったんだ、みたいなことを知った。

親父の最初の奥さんが三瀧牧子というソプラノの歌手で、大正の終わりから昭和の6年頃まで、5回ぐらいにわたって、フランスの歌曲の夕べという会をやった。親父が当時のお金で5円払って、堀口大學に歌曲集を日本語に翻訳してもらって、それを奥さんの牧子が歌う、近代フランス歌曲の独唱会でした。これが1927年ぐらいですかね。そのときに初めてエリック・サティの「Je te veux」という、「お前が欲しい」という曲を歌ったんですね。

これはその人の作品なんだと思うようにしています。そういう意味では安吾に愛情がちよつと少ないのかもしれない、うちの母親より。





坂口安吾 三千代夫人、長男・綱男と（昭和29年、桐生の自宅庭にて）
画像提供：新潟市「安吾風の館」

■安吾の息子として

坂口 でも母が亡くなってから、本を1冊出しました。『安吾と三千代と四十の豚児と』という本なんですけど、初めて自分が安吾の息子だということを考えながら。それが42歳のときなので、安吾の息子のキャリアとしては、まだ30年経ってない。

あと、檀一雄さんに「綱男ちゃん、同人誌に原稿を書きなさい」と言われたとき、原稿用紙に「文字書こうとした瞬間に、固まるんです。なんで固まったかというところ、この1行書いたものだけでも父親と比べられると思ったたら、たまったもんじゃなと思って。で、文芸の世界は一切進むのをやめたんです。三瀨さんが綱男君はなんか書くと思ってたよっておっしゃっていただけで、恐ろしくて書けなかった。

三瀨 まあ、偉大な父親を持つとそういうふうになるのかもしれないけれど、何やってもオタクっていうかね、こだわるとタイプで、こういうのはやっぱり長じると物書きになったりとか、どこかでいざれ安吾の血が出てくるのかなあと、ひそかに思った。

お父さんは、安吾は物書きとしてずっと通してんだけど、やっぱり書いてるものを読んでみると、一貫していますよね。彼の視点というか。それが本当に微動だにしない。特に「日本文化私観」とばっかり起きてました。

三瀨 ふたりでこうやって公開で対談するのは実は今日が初めてで。中原中也が僕が読ませたということは、ほとんど記憶にないのです。

何か縁というものが、不思議なものがあった、父親も安吾とつながりがあった、その息子同士がまたこういうような縁を結ぶ。本当に人生って何が起きるかわからない。彼、今日で69歳ですから、来年初希で。15歳で出会って、僕もまだ22歳でしたからね。54年も経って、またこういう話をするなんて。

安吾忌に三千代さんに呼ばれて行って、まだ檀一雄さんとかああいう方たちが来

んかに法隆寺や平等院がなくなったって何も困りはしないみたいだな、ああいうことを戦前の昭和17年ぐらいに書いているわけですよ。そういうすごい人と誰も比べはしないんだけど、本人が意識してしまうのは、まあしようがないのかなと思います。

僕の場合は美術の世界で、特に現代美術の世界ですから、アーティストになりたいという人たちがたくさん来ますけれども、そういうなかで才能の見極めをしていかなきゃいけない。僕の、綱男君への見立てはですね、絶対物書きになるんじゃないかなと思っていた。それがちょっと外れてはしまったけども。でもやっぱり生き様としては本当に自分のいい生き方をしてきていると思います。

日本の若い作家たちも、最近はどういうスタの時代なんで、リアルの世界ではなくて、インスタグラムで何かちらっと見せて、SNSで何かやっていくみたいな時代となっています。ちょっと僕らみたいにリアルでやってきているものとは違うので、時代もだいぶ変わってきている。でもやっぱりリアルなものでちゃんと世界を自分で掴んでいないと、ああいうインスタグラムとかは、写真や映像の世界なので、大きさがわからない。イメージだけで評価される時代になっていて。ですから、わざわざギャラリーの空間を持って、そこで皆さんに足を運んで見てもらうということがとても大切だと思ってい

てらっしゃって、錚々たるメンバーのなかに末席を汚していたりとか。あと、「クラクラ」にも飲みに行ったりとか、けっこう三千代さんにかわいがられていましたね。実は綱男君が高校に入ったら、三千代夫人からプレゼントがありました。当時、冬樹社という出版社から、『坂口安吾全集』が出たんです。それを全巻いただきまして、とてもじゃないけど、当時のおこづかいじゃとても買えない本だったんですが、その本はいまだに大切にしています。

坂口 手塚真さんが安吾全集を買ったとき、全集がもう巷に出ていなくて、神田の書店で、なんと、37万円もしたんですよ。

る。今はシンガポールとニューヨークと、東京の市ヶ谷に画廊を持っていますが、売れるとか売れないとかじゃなくて、作家たちはみんな自分のやりたいことをやっている、そんなギャラリーをやっています。

綱男君も本当に自分のやりたいことをやってきているんじゃないかな。そうでしょう？

坂口 水は流れるがごとく下の方へ流れていく。僕は流されるままここに来ていると。だから自分の意志というよりも、なんか気がついていたらここにいてるっていう。そういう奇妙な生き方をさせてもらえたのは、安吾の息子だったからかなあと。

文壇で放蕩息子の「綱男ちゃん」って有名ですから。一時「綱男ちゃん」ってラリー買ったんだってね」とかっていうのが文壇でまことしゃかにささやかれるようになって。それは、うちの母が、「イタリア製のフェンディっていい車に乗っているのよね」って知り合いの編集者かなんか言ったんですよ。その前に乗ってた車がフェアレディっていう名前の車で、そのあとに乗ってたのがイタリア製のクルマ。フェラリーとは格の違い、アルファロメオっていう車だったんですよ。ある時、尾崎士郎さんの息子さんから、安岡章太郎さんが聞いたとかで、「綱男さんがフェラリー乗ってるらしい」って言われて。大体そうやって話が大きくなるんですけど、そんなようなこ

ただそれは1回目の全集で、2回目の全集が筑摩から出るんですけど、筑摩の全集のほうがいいです。なぜならば間違いが少ないから。もつと面白いのは、筑摩の全集は発表年順に本が組まれているんです。作家の全集って、あんまり発表年順に組んだりしないんですよ。ジャンル分けしてみたり、傾向分けしたりっていうのが主なんですけども、発表年順に並べると、安吾が何を考えて、何をそのときに見ているかというのがすごくよくわかるんですよ。1巻から5巻までが戦前で、6巻から13巻までが戦後なんです。ただ戦前と戦後で、本のボリュームが全然違うんですよ。だけど、戦後は8年しか生きていないんです。だからどれだけ書いたかっていう。しかも寝る間を惜しんでじゃないんですよ。寝ないためにヒロポンっていう覚醒剤みたいなものを飲んで、寝るために、手のひらにざらっと並べた睡眠薬をウイスキーで飲み干すっていうことをやっていたわけです。だから、もう書けない、今日は寝ようと思ったら、睡眠薬を飲む。目を覚ましてまだ書きたいと思ったら、ヒロポンを飲んでしゃうつという。まあ、それは脳溢血で死にますよね、48で。

中也記念館で見たんですけども、うちの父が30のときに中也さんは29歳だったと。年端も近いんだと思うと、今また中原中也の詩集を読んだら、印象が変わるんだろうなあ。



三瀨末雄

ミヅマアトギヤラリー
エグゼクティブ・ディレクター

東京生まれ。成城大学文芸学部卒業。1980年代からギャラリー活動を開始、1994年ミヅマアトギヤラリーを東京・青山に開廊（現在は市谷田町）。2000年からその活動の幅を海外に広げ、日本、アジアの若手作家を中心にその育成、発掘、紹介を続けている。これまで会田誠、山口晃、池田学、宮永愛子など多くの作家を輩出している。

坂口綱男

写真家、エッセイスト、
「安吾風の館」館長

1953年、坂口安吾の長男として群馬県桐生市に生まれる。カメラマンとしてコマーションシャル及びエディトリアル分野で仕事をしてきた。また、1995年からパソコンによるデジタルグラフィック・ワーク等にも携わる。1994年に母・三千代が亡くなったから、父親に関する講演やエッセイ等を執筆。



詩集『山羊の歌』

令和5年2月15日(水) — 令和6年2月12日(月・祝)



展示2 収録詩篇

『山羊の歌』には、大正13年から昭和9年までの約10年間に制作された44篇の詩が収録されています。その中には、「サーカス」「汚れつちまつた悲しみに……」などの著名な詩の他、自らの詩の方針が立ったとした「朝の歌」や、倫理的な志向がうかがえる詩の一つの到達点といえる「いのちの声」など、読み応えのある詩が多くあります。

展示2では、『山羊の歌』に収録されている詩篇を、詩集における構成にも注目して紹介しました。

展示3 読んだ人々

昭和9年12月に『山羊の歌』が刊行されると、小林秀雄が真っ先に書評を発表、その後も主に友人の文学者による書評が出ました。昭和12年9月には、再刊の企画が立てられていたようですが、翌月中也没後も、企画は実現しませんでした。

中也没後も『山羊の歌』の価値は徐々に高まり、昭和10年代後半には入手困難になっていったようです。詩人の中村稔氏は、旧制高校の生徒だった頃、学校の図書室で『山羊の歌』を筆写したといっています。

展示3では、『山羊の歌』がどのように

中原中也の第一詩集にして、生前唯一の詩集でもある『山羊の歌』。200部限定出版という、比較的少数数の出版でしたが、小林秀雄、河上徹太郎、草野心平らが高く評価し、詩人・中原中也の名を広く知らしめる本となりました。

本展は、『山羊の歌』刊行までの紆余曲折、収録詩の解説、刊行後の読者の反応など、さまざまな視点から『山羊の歌』を紹介しました。



展示1 刊行までの足跡

中原中也にとって、詩集の刊行は長年の望みでした。最初の構想からおおよそ5年を経た昭和7年、いよいよ本文の印刷に取りかかります。中也は、見開きで見た際の活字のレイアウトなど細部にまでこだわり、校正は7回行ったといえます。そのような印刷へのこだわりが資金不足を招き、計画の中断を余儀なくされます。それから更に2年の歳月をかけて、ようやく刊行まで辿り着きました。

展示1では、『山羊の歌』の書誌、詩集の構想から刊行にいたるまでの足跡を紹介しました。

読み継がれたのかを、読んだ人々の言葉を通じ紹介しました。

【主な展示資料】中原中也『山羊の歌』、『山羊の歌』校正原稿、『山羊の歌』紙型、中原中也原稿「処女詩集序」「春の夕暮」「朝の歌」、中原中也筆写原稿「少年時」(ラッポー/鈴木信太郎訳)、創作ノート「ノート1924」「ノート少年時」、安原喜弘宛中原中也葉書(昭和7年9月23日)、竹田謙二郎宛中原中也葉書(昭和9年12月10日)、「白痴群」創刊号、「紀元」創刊号

坂口安吾と中原中也——風と空と

令和4年7月28日(木) — 10月2日(日)



諸君、偉大なる博士は風となつたのである。

あとに花びらと、冷めたい虚空がはりつめてゐるばかりでした。

これが私の故里だ。さやかに風も吹いてゐる。

2022年
7月28日 THU — 10月2日 SUN
特別企画展
坂口安吾と
中原中也
風と空と
中原中也記念館

あゝ、
空の奥、
空の奥、

場所は東京・京橋の酒場「ウインザー」とされています。河上徹太郎、小林秀雄、安原喜弘といった共通の友人がおり、フランス文学の素養があるところも一致していた二人は、たちまち意気投合し、深く交友を結びました。

展示1では、二人の生い立ちから、出会いと交友、中也の死による別れまでを、二人の言葉や関係者の証言などからたどり、展示しました。

《坂口安吾の愛用品》
新潟市「安吾風の館」所蔵の安吾愛用品をまとめて展示しました。そのうち「腕時計」「筆箱」「眼鏡型オベラグラス」「ライター」「クジラの牙のパイプ」の5点については、安吾のご長男・網男氏にコメントをいただき、愛用品と並べて展示しました。

展示2 文学上の共鳴

安吾と中也の文学は、「風」や「空」といった自然にまつわる言葉に、深い象徴性を感じさせる点が同じである一方、その表れ方、イメージには明確な違いがあります。そして、その違いを見ることで、それぞれの文学の魅力が際立つように思われます。

展示2では、「風」や「空」などのキーワードを軸に、安吾と中也の作品を比較することで浮かび上がる特質から、二人の文学の魅力に迫りました。

評論「墮落論」、小説「白痴」「桜の森の満開の下」などで知られる作家・坂口安吾。坂口安吾と中原中也は、同世代の友人として深く交友を結びました。安吾と中也は、ともに雑誌「紀元」の創刊に携わりました。また、フランスの詩人・ランボオの訳詩集を中也が刊行した際、安吾は中也の訳を通じたランボオの詩について感想を発表しました。戦後、安吾の小説やエッセイに「中原中也」という名の人物がたびたび登場するようになります。安吾は「中原中也」を、無鉄砲で、時には意地悪もするけれども、人間味のある愛すべき人物として描いています。

本展では、安吾と中也の交友について、二人の接点となる場所・雑誌・人物を基点にして展示しました。また、「風」や「空」など、安吾と中也の文学に関わりの深いキーワードから、二人の文学の魅力の一端に迫りました。そして、「墮落論」「白痴」など、戦後まもなく世間の注目を浴びた安吾の作品を紹介しました。

協力・新潟市「安吾風の館」

展示1 交友

坂口安吾と中原中也が出会った時期の詳細は定かではありませんが、安吾の小説「二十七歳」などによると、昭和7年、

展示3 中也没後の安吾

安吾は戦中から歴史小説、日本文化論などで独自の境地を開拓していきます。戦後まもなく発表された評論「墮落論」や小説「白痴」などの作品で世間の注目を浴び、一躍人気作家となった安吾は、探偵小説、文明批評、囲碁・将棋の観戦記など、さらに活躍の場を広げ、戦後文学を代表する作家の一人となります。昭和30年に亡くなるまで数多くの作品を世に送り出し、それらは今も多くの読者に愛されています。

展示3では、中也没後における安吾文学について、作品の一部を抜粋して紹介しました。

【主な展示資料】坂口安吾遺品(万年筆、筆箱、鉛筆削り、腕時計、眼鏡型オベラグラス、背広・シャツ、原稿用紙、他)、坂口安吾ノート「鳥原の乱」第一稿、坂口安吾「吹雪物語」「日本文化私観」「白痴」「墮落論」、中原中也ノート「ノート1924」、「白痴群」創刊号、「青い馬」創刊号、「紀元」創刊号

中也の住んだ町——幼少期

会期 令和4年4月20日〔水〕～7月24日〔日〕



現在の山口市湯田温泉で生まれた中原中也は、単身赴任していた父・謙助と暮らすため、生後半年で母・フクラに連れられ、中国大陸の旅順へ向かいます。その後6歳で山口に戻るまで、謙助の転任にともなって、柳樹屯、広島、金沢と移り住みました。

生まれ故郷とは違う土地で育まれた、幼い日の記憶や家族が語った思い出話は、中也の作品に大きな影響を与えたといわれています。

本展では、当時の町の様子や同時代の文学者との接点などにも触れながら、中也の幼少期について詳しく紹介しました。

展示 1 中国大陸——旅順・柳樹屯

明治40年、中也は生まれてまもなく、軍医として単身赴任していた父・謙助と暮らすため、母・フクラと祖母・スエとともに中国の旅順へ向かい、のちに柳樹屯へと移り住みます。後に、そのときの思い出をフクラからくり返し聞かされた中也は、フクラの語る旅順、柳樹屯の情景が幼

少期の原風景の一つとなり、その心情を散文「一つの境涯」などに綴っています。展示1では、中也の幼少期の思い出の原点となった旅順・柳樹屯時代について紹介しました。

展示 2 広島

明治42年、中也が2歳の時に謙助の転任に伴い一家は広島市上柳町に転居します。のちに同市の鉄砲町に移り、中也は4歳になると、ここから広島女学校附属幼稚園（現・広島女学院ゲーンズ幼稚園）に通いました。また、この広島で弟の亜郎、恰三が生まれています。中也は広島について多くを書き残してはいませんが、フクラの回想によると、のちのちまで広島の思い出を懐かしそうに語っていたそうです。

展示2では、中也と同時期に広島で過ごした作家の原民喜や松本清張など、同時代の文学者たちにも焦点を当て、中也が暮らした当時の広島の様子を浮かび上がらせました。

展示 3 金沢

明治45年、中也が5歳の頃、謙助の転任により、今度は石川県金沢市へと移り住みました。翌年、中也は兼六園の近くにあった北陸女学校附属第一幼稚園（現・

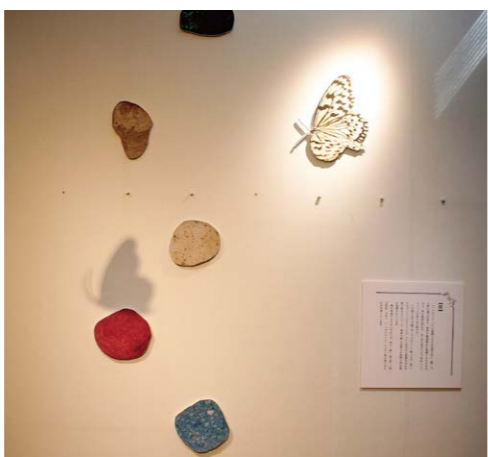
同時代文学におけるメルヘン

「メルヘン」という言葉は、ドイツ語の Märchen に由来する外来語です。童話やおとぎ話ばかりではなく、文学のジャンルとしては、空想性に富んだ非現実的な物語を指します。ドイツ・ロマン派の作家たちがメルヘンとして幻想的な物語を多く創作し、日本の文学者にも影響を与えました。「一つのメルヘン」ではタイトルに「メルヘン」という言葉が用いられることで、非現実の世界で起きている物語であることが示されています。

ここでは「メルヘン」に関する同時代の作品として、萩原朔太郎「独逸黒的文章」と立原道造「物語」を紹介しました。

その他のトピック

詩を彩るキーワード〈さらさらと〉〈徒石〉〈蝶〉／読み継がれる詩



詩の一節を影絵で表現したコーナー

中也、この一篇——「一つのメルヘン」

会期 令和4年10月5日〔水〕～令和5年4月16日〔日〕

中原中也の代表作をじっくりと味わうシリーズ企画の第4回目。今回は「一つのメルヘン」を取り上げました。この作品は「文芸汎論」昭和11年11月号に発表され、のちに中也の第二詩集『在りし日の歌』に収録されました。国語の教科書にも多数掲載され、中也の代表作として人気の高い詩の一つです。

本展では、この詩が書かれた背景や、詩の舞台になったといわれる故郷・山口の風景、特徴的なオノマトペの使い方など、さまざまな角度から作品を読み解きました。

制作当時の中也

当時の中也は、2年前に第一詩集『山羊の歌』を刊行し、詩人として活躍の場を広げていました。「一つのメルヘン」が発表された同時期には、「ゆきてかへらぬ」「あばずれ女の亭主が歌つた」「幻影」などの作品が雑誌に掲載され、意欲的な創作活動を知ることができます。

しかしその直後、愛児・文也が2歳で亡くなるという突然の悲劇が中也を襲います。

「一つのメルヘン」では、非現実的で幻想的な出来事が、物語を語るような文体で綴られています。童話のような雰囲気には、中也が愛読していた宮沢賢治の影響がみられます。賢治の代表作「銀河鉄道の夜」に登場する〈銀河の河床〉〈河原の礫〉といったモチーフや、此岸と彼岸との境界という舞台には、「一つのメルヘン」の世界との類似点を見出すことができます。



【主な展示資料】中原中也原稿「一つの境涯」「その頃の生活」「履歴書」、安原喜弘宛中原中也書簡（昭和7年8月23日）、雑誌「隼」第2巻第6号、北陸女学校第一附属幼稚園の通信簿、吉田緒佐夢・宇佐川紅萩・中原中也『末黒野』、中原フク述・村上護編『私の上に降る雪はわが子中原中也を語る』



【主な展示資料】中原中也『在りし日の歌』、中原中也原稿「蟬」「坊や」「誘蛾燈詠歌」、安原喜弘宛封書（昭和9年8月25日付）、徒石の粉末、「一つのメルヘン」掲載教科書

萩原朔太郎大全2022

令和4年10月26日～11月27日

詩人・萩原朔太郎の没後80年にあたる令和4年、朔太郎を介した企画展「萩原朔太郎大全2022」が全国52か所の文学館や美術館、大学等で開催されました。

中原中也記念館では、その一環として「萩原朔太郎と中原中也―萩原朔太郎大全2022」と題し、萩原朔太郎「月に吠える」（有島生馬宛自筆献呈署名入り）と中原中也『ランボオ詩集』（萩原朔太郎宛自筆献呈署名入り）を展示しました。同時に、並行して開催中のテーマ展示「中也の本棚―日本文学篇」と企画展Ⅱ「中也、この一篇―一つのメルヘン」において朔太郎を紹介しているパネルに共通のエンブレムを設置して、二人の詩人の文学的なつながりを紹介した他、読書コーナーで平成27年に開催した特別企画展「萩原朔太郎と中原中也」のパンフレットや機関誌「中原中也研究」第21号（特集「萩原朔太郎と中原中也」）を手にとっ



第7回ぼうしの詩人賞

～あつまれ！未来の中也たち！～

「ぼうしの詩人賞～あつまれ！未来の中也たち！～」は山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、平成28年に創設された創作詩のコンクールです。今回は第7回を迎え、93篇の応募作品の中からぼうしの詩人賞（最優秀賞）1篇、優秀賞4篇、館長賞6篇が選ばれました。

12月3日に表彰式、作品朗読会をクリエイティブ・スペース赤れんがで開催し、ぼうしの詩人賞には、中かがぶつていた帽子にそっくりの黒い「詩人のぼうし」が贈られました。表彰式後、朗読を好んだ中也にならない、それぞれが自作の詩を自分の声のせて表現しました。



連続テレビ小説

「ちむどんどん」関連企画

令和4年7月25日～10月2日

NHKの連続テレビ小説「ちむどんどん」（令和4年4月11日～9月30日放送）の中で中原中也の詩が使われるにあたって、中原中也記念館では資料を提供するとともに、そのシーンが初めて放送された日から放送終了まで、館内でのミニ展示と公式ウェブサイトを通じた関連企画を実施しました。

今回は応募数こそ少なかったものの、小さな詩人ならではの視点で生活のなかで感じたこと、見落としてしまいうようなものに焦点をあてて、自分の世界を表す作品に心動かされました。詩に親しんだ経験が、子どもたちの心に広がり続けるよう願っています。

ぼうしの詩人賞・最優秀賞

「愛しく咲くものも」 帆足桜さん

優秀賞

「いもうとはかいじゅうだ。」 田淵陽仁さん

「あいするころのうた」 藤田鳳一朗さん

「奏」 黒木美優さん

「喧嘩」 平田旬さん

館長賞

「僕は歌う」 門田青空さん

「都会」 喜多諒典さん

「勇気のかげら」 黒木未羽さん

「蛭」 品川大さん

「コンパス」 森岡美夢さん

「十星十色」 森川優羽さん

※記念館ウェブサイトにて、過去の入選作品をご覧いただけます。



使われた詩は、登場順に「吾子よ吾子」「修羅街晩歌」「別離」「子守唄よ」「月夜の浜辺」「無題」「わが半生」「初夏の夜」「聖浄白眼」の9篇で、ドラマの中で朗読されたのはそれぞれの詩の一部でしたが、展示およびウェブサイトではその全篇を紹介しました。また、館内では台本やドラマオリジナルの『中原中也詩集』を展示し、その装幀の工夫などを紹介しました。



中原中也自筆資料の

画像公開

東京都立川市にある国文学研究資料館は大学共同利用機関のひとつで、国内各地の日本文学とその関連資料のデータベースを研究者に提供し研究を推進する日本文学の総合研究機関です。その活動の一環として行われてきた「近代文獻草稿」

公開講演

「中原中也 未発表詩篇の可能性」

令和4年9月17日、中原中也の会との共催により、詩人の佐々木幹郎氏による講演「中原中也 未発表詩篇の可能性」が開催されました。『新編 中原中也全集』（角川書店）の責任編集委員でもあった佐々木氏は、スクリーンに中也の未発表原稿の画像を投影し、その推敲過程を解説。原稿から見てくる言葉の揺れ動きから、中也の思いに深く迫っていく講演でした。

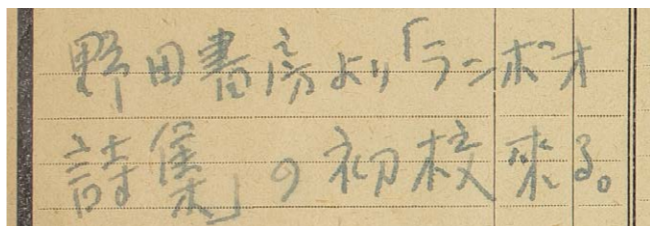


公開対談

「詩と声と音楽と」

中原中也の末弟で、ハーモニカ奏者としても知られる伊藤拾郎氏が没後20年を迎

原稿類に関する所在目録調査と研究」事業に、中原中也記念館としても協力することになり、令和4年10月、中原中也の自筆資料のデジタル画像が撮影されました。全てのデータは、インターネットを通じて、国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」および中原中也記念館公式ウェブサイトの収蔵資料データベースでご覧いただけるようになります。ぜひアクセスしていただいで、中也の筆跡の鮮明な画像をご覧ください。



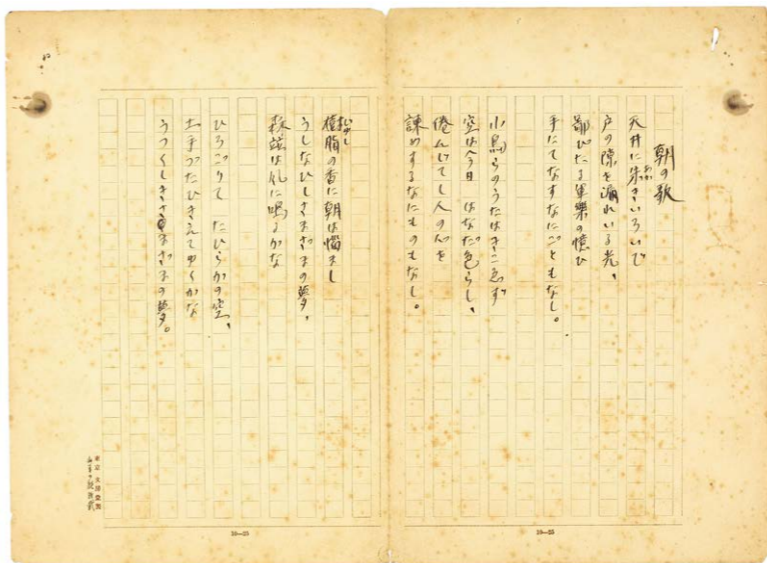
「ボン・マルシェ日記」(昭和12年8月11日)より

えることから、令和5年2月4日、公開対談「詩と声と音楽と」を開催しました。第1部では、詩人の和合亮一氏をお迎えし、当館館長とともに、拾郎氏の遺した演奏を聞き、詩のことばと声や音楽との関わりについて語り合いました。第2部では、拾郎氏の音色を受け継ぐ山口県ハーモニカクラブの吉本小百合氏の演奏と、和合氏と館長の朗読をお聴きいただきました。



「朝の歌」原稿

詩「朝の歌」の原稿が新たに収蔵されました。署名はありませんが、筆跡から中也の自筆原稿と見られ（ただし、欄外左下に「山羊の歌所載」とあるのは別人の筆跡と考えられます）、これまで存在を知られていなかった新発見資料になります。



「朝の歌」は中也自身が詩人として（ほゞ方針立つ）（『詩的履歴書』）と振り返っている作品です。大正15年5月に初稿、8月に定稿が書かれ、昭和3年5月に「スルヤ」第2輯に発表されました（第一次形態）。その後、昭和4年10月に雑誌「生活者」に発表され（第二次形態）、昭和7年の前半に詩集編集の過程で書かれた原稿（第三次形態）を経て、詩集『山羊の歌』に収められていました（第四次形態）。

この原稿は、原稿用紙（文房堂製）の罫線の欠け具合等の特徴から推定される使用時期や本文の異同等から、昭和4年に書かれた第二次形態に相当するものと推定されます。同じ第二次形態でも「生活者」に発表された本文と比較していくつかの異同があり、この作品の推敲過程を考える上で興味深い資料です。

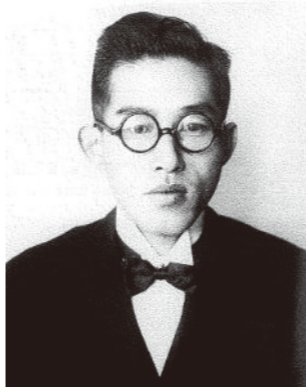
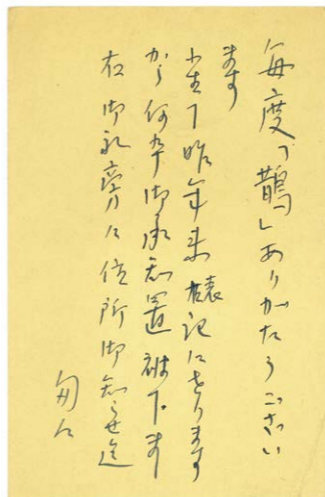
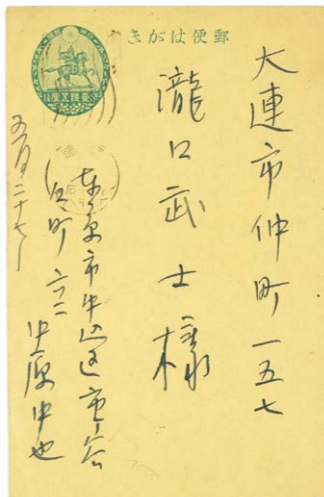
先に収蔵されていた原稿は第三次形態で、第三連一行目までしか書かれていませんでした。中也の自筆で「朝の歌」全篇を読むことができたのは初めてで、その意味でも貴重なものといえるでしょう。

瀧口武士宛書簡

「朝の歌」原稿と同じく、新発見資料として新たに収蔵されたのが瀧口武士宛書簡（はがき一枚）です。表に「五月二十七日」という日付が書かれています。が、年代はなく消印も判読が困難です。裏に書かれた文面によれば、中也が市ヶ谷に転居した翌年に投函されているので、昭和11年の同日に書かれたものとわかります。

瀧口武士は大分県出身の詩人で、短詩運動や新散文詩運動の旗手として「亜」詩と詩論などのモダニズム系の文芸雑誌に作品を発表していました。また、大連で小学校教員として勤務しながら同人誌「鵲」を編集発行していました。文面からは瀧口が中也に「鵲」を送付していたことがうかがえます。

中也の日記には「鵲」第十輯に詩稿發送（昭和11年6月23日）の記述があり、同年7月15日発行の同誌第10号に中也の詩「夢」が掲載されました。こうした瀧口との交流の一端を示す資料として注目されます。



瀧口武士 © 国東市教育委員会

主なできごと

2022(令和4)年度 記念館行事記録

2022年4月 - 2023年3月

2022年	
4月1日	特別展示 震災復興応援企画(前年度から継続) 当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介
20日	企画展I「中也の住んだ町——幼少期」(~7月24日) 特別展示 第27回中原中也賞(~5月22日)
22日	第211回 中原中也を読む会 第27回中原中也賞受賞詩集 國松絵梨「たましいの移動」を読む
29日	生誕祭「空の下の朗読会」(湯田温泉ユウベルホテル松政) 自由参加の朗読会、二階堂和美ライブ 第27回中原中也賞贈呈式(湯田温泉ユウベルホテル松政) 受賞詩集:國松絵梨「たましいの移動」 記念講演「詩歌の魅力」 講師:小島ゆかり 主催:山口市、(公財)山口市文化振興財団 中也web朗読会(オンライン) 中也または自作詩の朗読を動画でTwitter投稿
5月27日	第212回 中原中也を読む会 屋外展示「天気の時」(前期)——「別離」「蛙声」を読む
6月24日	第213回 中原中也を読む会 企画展I見学
7月22日	第214回 中原中也を読む会 中原中也の詩「羊の歌」を読む 28日 特別企画展「坂口安吾と中原中也——風と空と」(~10月2日) オープニングセレモニー開催 特別展示 連続テレビ小説「ちむどんどん」関連ミニ展示(~10月2日)
31日	プロムナード・トーク① 特別企画展解説
8月3日	特別企画展関連イベント ワイカムシネマ連携「坂口安吾原作映画特集」第1弾(~7日 YCAM)
6日	特別企画展関連イベント 公開対談(山口市葉香亭) 出演:三瀧末雄、坂口綱男 特別企画展関連イベント ワイカムシネマ連携「坂口安吾原作映画特集」トークイベント①(YCAM) 出演:手塚真
7日	特別企画展関連イベント ワイカムシネマ連携「坂口安吾原作映画特集」トークイベント②(YCAM) 出演:坂口綱男
20日	プロムナード・トーク② 特別企画展解説
26日	第215回 中原中也を読む会 特別企画展見学
31日	機関誌「中原中也研究」第27号発行
9月17日	公開講演「中原中也 未発表詩篇の可能性」 (湯田温泉ユウベルホテル松政、オンライン同時配信) 講師:佐々木幹郎 共催:中原中也の会

9月18日	特別企画展関連イベント ワイカムシネマ連携「坂口安吾原作映画特集」第2弾(YCAM)
23日	第216回 中原中也を読む会(吉敷地域交流センター) 蓄音器で聴く中原中也ゆかりの音楽
25日	プロムナード・トーク③ 特別企画展解説
10月4日	中也忌関連イベント 中原中也へのメッセージ募集(~21日)
5日	企画展II「中也、この一篇——「一つのメルヘン」」(~2023年4月16日)
21日	中也忌関連イベント 狐の足あととのコラボ企画(~23日) ノベルティグッズプレゼント、記念カフェメニュー提供
22日	中也忌 職員による墓参、中也へのメッセージお供え 中也忌関連イベント メイシ交換会(~23日) 共催:山口市立大学「中原中也メイシ交換会運営委員会」
26日	特別展示 萩原朔太郎と中原中也——萩原朔太郎大全2022(~11月27日)
28日	第217回 中原中也を読む会 中原中也の散文詩「郵便局」「幻想」を読む
11月25日	第218回 中原中也を読む会 企画展II見学
12月3日	第7回「ぼうしの詩人賞~あつまれ! 未来の中也たち!~」 (クリエイティブ・スペース赤れんが) 表彰式・入選作品朗読会
7月	第7回「ぼうしの詩人賞~あつまれ! 未来の中也たち!~」入選作品展示(~2023年2月19日)
23日	第219回 中原中也を読む会(吉敷地域交流センター) 福田百合子名誉館長と中也の詩「雪の賦」を読む
2023年	
1月27日	第220回 中原中也を読む会 現代の詩人・辻征夫の詩を読む
2月4日	公開対談「詩と声と音楽と」(カリエンテ山口) 第1部:対談 第2部:演奏、朗読 出演:和合亮一、中原 豊、山口県ハーモニカクラブ・吉本小百合
15日	第20回テーマ展示「詩集『山羊の歌』」(~2024年2月12日) 特別展示 初公開・新発見資料 原稿「朝の歌」、瀧口武士宛書簡(~2月19日)
18日	開館29周年
24日	第221回 中原中也を読む会 テーマ展示見学
3月24日	第222回 中原中也を読む会 屋外展示「天気の時」(後期)——「死別の翌日」「雪が降ってある……」を読む
31日	館報第28号発行

中原中也の会

2022年	
5月22日	中原中也の会第25回研究会 「『荒地』派の詩人たちと中原中也」(オンライン) 総合司会:佐藤元紀 報告①「詩(人)の個性、連続性、切断について」 報告者:北川 透 報告②「鮎川信夫と中原中也——「生命の倦怠」は「地球最後の日まで止むことがない」——」 報告者:宮崎真素美 対談 出演:北川 透、宮崎真素美
7月31日	会報第52号発行

9月17日	中原中也の会第27回大会「未発表詩篇を読む」 (湯田温泉ユウベルホテル松政) 総合司会:加藤邦彦 講演「中原中也 未発表詩篇の可能性」 講師:佐々木幹郎 企画「未発表詩篇で編む、中也第三詩集」 出演:阿毛久芳、四元康祐、蜂飼 耳 司会:権田浩美
18日	中原中也の会第21回セミナー (湯田温泉ユウベルホテル松政、中原中也記念館) 講師:池田 誠 中原中也記念館特別企画展「坂口安吾と中原中也——風と空と」見学
2023年	
1月31日	会報第53号発行

第28回中原中也賞

『そだつのをやめる』

あおやぎ なつみ
青柳菜摘氏



撮影：和田 信太郎

第28

回の中原中也賞は、公募および推薦による204詩集の中から、青柳菜摘氏の『そだつのをやめる』(thoasa(トオアサ))が選ばれました。

青柳菜摘氏は平成2年生まれ、32歳(受賞時)。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻を修了し、アーティストとして活動しています。第21回中原中也賞受賞者のカニエ・ナハ氏に勧められ詩作を開始。令和3年に第一詩集『家で待つ君のための暦物語』を刊行。受賞作『そだつのをやめる』は第二詩集で、37篇の詩が収められています。

青柳菜摘詩集『そだつのをやめる』は、まったく新しい「時間」の取扱いかたをしている。セミや蝶などの虫の視点から生きものの成長(育ち方)を見る。同時に成長すると見えなくなる成長の過程を、また人間存在そのものを見直そうとしている。本文を読み進めるうちに、見つめている人間がどこにいるかわからなくなる、距離感の無くなる面白さがある。詩集の中に閉じ込められるような、言葉の迷路の快感に誘われる。その新しさによって、第28回中原中也賞の受賞作に決定した。

(一)選評「より」



Nakahara
Chūya
prize 28th

(二)外側の動物園

ミズがこちらに来る——雨ではなく空気中に含まれているミズがこちらに来る——空から刺さる葉が雨に落ちる
葉がつやめくいきいきと緑色に
どんどん歩く左肩にフェンスが続く
フェンスはジャンプしても届かない高さ
きみが簡単に左側へ行けないように
フェンスの金網のひし形の穴からニホンザルの声が聞こえ
1キロ先にいるクジャクと全長3メートルあるワシと目があう
文章で書いてある説明で理解できることは目で見て分かること
以上に少ない上に発見した時に気づくことと意味が変わって
ることが多々ある。」
「文章は読まないほうがいいんですか？」
「発見をすればいい。意味を解釈しようと思いを悩ませるんじゃない、そこから発見した何かをみつけに行けばいい。」
先生は言う

2023(令和5)年度 記念館事業・関連行事予定

2023年4月—2024年3月

展示	イベント・記念日	中原中也を読む会
2022年度企画展Ⅱ 「中也、この一篇 ——「一つのメルヘン」」 (2022年10月5日～2023年4月16日)	湯田温泉 白狐まつり (4月1日、2日)〈無料開館日〉	毎月 第4金曜 中原中也記念館ほか
第20回テーマ展示 「詩集『山羊の歌』」 (2月15日～2024年2月12日)	生誕祭 空の下の朗読会 (4月29日 中原中也記念館前庭)〈無料開館日〉	中原中也の会 中原中也の会第26回研究集会 (5月27日 神戸女子大学教育センター)
企画展Ⅰ 「中原中也と関東大震災」 (4月19日～7月23日)	中也忌 (10月22日)〈無料開館日〉	中原中也の会第28回大会 (9月9日 ホテルニュータナカ)
特別企画展 「草野心平と中原中也」 (7月27日～10月1日)	山羊の日(第1詩集『山羊の歌』刊行日) (12月10日)	中原中也の会第22回セミナー (9月10日 ホテルニュータナカ、 中原中也記念館)
企画展Ⅱ 「中也と短歌」 (10月4日～2024年4月14日)	開館30周年 (2024年2月18日)〈無料開館日〉	※日程変更や中止の場合もございます。
第21回テーマ展示 「空の詩」(仮) (2024年2月15日～2025年2月中旬)		

中原中也記念館 館報【第28号】 令和5年3月31日

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉一丁目11-21 TEL 083-932-6430 FAX 083-932-6431 E-mail: chuyakan@c-able.ne.jp https://www.chuyakan.jp/